鹿乗川流域遺跡群南群の検討（1）

宮腰健司

鹿乗川流域遺跡群南群の古代～中世の遺構について検討を行った。最南端にある惣作遺跡では溝で区画されたエリアがあり、出土遺物から木簡の使用や木器・銅器製作が考えられ、寺領廃寺との関連が想定できる。それ以外の地区では居住域と耕作地（水田・畑）が組み合わさったエリアが散在する。

1．はじめに

安城市南東部の碧海台地の縁辺に沿って流れる鹿乗川流域には数多くの遺跡が分布する。これらの遺跡は鹿乗川流域遺跡群と呼ばれ、東西の鹿乗川が合流する地点を境に大きく北群と南群に分かれる（考古学フォーラム編集部 2013 など）。北群については、東西に広く遺跡が展開するが、南群については、矢作川との距離も近く、碧海台地崖下で南北に遺跡が展開するといった違いがある（図１）。今回は南群にある姫下遺跡・寄島遺跡・下懸遺跡・五反田遺跡・惣作遺跡について検討を加えていく。南群に属する遺跡は、時期的には弥生時代～古墳時代前期と古代～中世の２時期に大きく遺跡が形成されている。前述の時期の検討は今後とし、本文では後述の古代～中世の時期について検討を加えていく。

1．遺跡の検討

弥生時代～古墳時代前期の遺構については比較的遺物量も多く、時期の決定が容易であるのに対し、これらの遺構に重複するように造られる古代～中世前期の遺構は点数も少なく、また小片であることも多く、時期を決めることが困難であることが多い。特に、多くの弥生時代～古墳時代前期の遺物に伴って古代～中世の遺物が小片且つ数点しか出土しない事例では、確実に遺構に属するものか、何らかの理由で混入して発掘調査時に誤認したものかの区別が困難である場合がある。

（国土地理院電子地形図 1/25000 を改変）

図１　南群調査区位置図（1/20,000）

本文では刊行された報告書に古代～中世の遺物が掲載されている遺構を抽出し、各々の遺構の関係性を検討することによって遺構の評価をおこなった。また遺物図が掲載されていないも

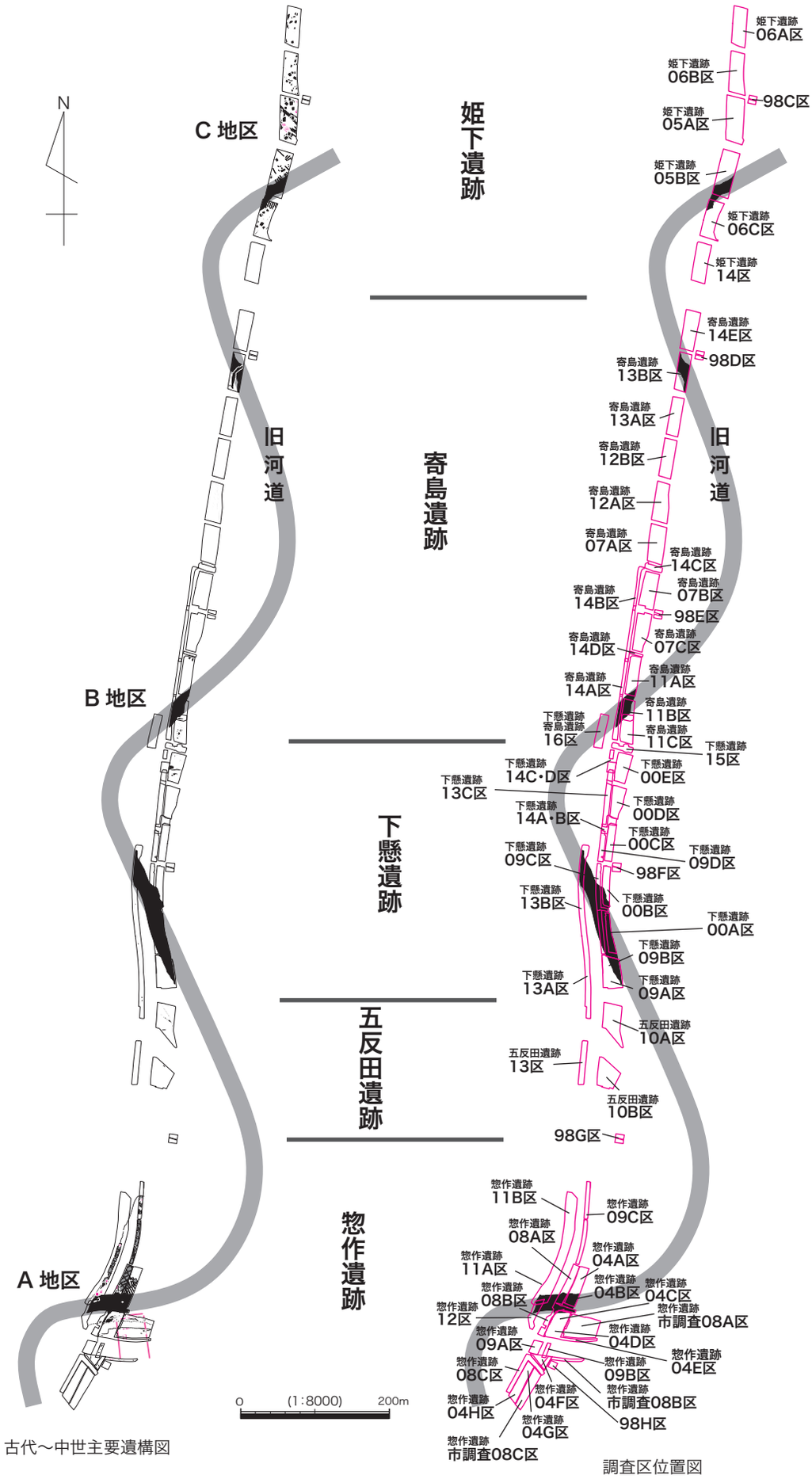


図２　鹿乗川流域遺跡群南群古代～中世主要遺構図・調査区位置図（1/8,000）

のでも、文中に須恵器・灰釉陶器・古代〜中世土師器・中世陶器が出土したという記載があるもの、さらに古代〜中世遺構と同類・同種のものについては検討の対象に加えている。

その結果、古代〜中世の遺構には分布に濃淡があることがわかった。遺構がまとまっている部分を南からA地区、B地区、C地区と呼称して、三地区に分けて記述していく。調査区は愛知県埋蔵文化財センターの調査分は遺跡名＋西暦年度＋調査区名と、鉄塔移設地点は西暦年度＋調査区名、安城市教育委員会調査分は遺跡名＋市調査＋西暦年度＋調査区名と表記した。

A地区：惣作遺跡（図３〜図７）

東西に走る旧河道を挟んで南北に遺構が展開する。この場所での旧河道は最大幅約40mを測るが、古代〜中世前期時点の川幅についてははっきりしない。また深さは、古墳時代早期〜前期では２〜2.5mで、古代〜中世前期にはその半分程度の１〜1.5m程までに埋没する。出土遺物には、土器陶器に加え、木器がややまとまってみられる。木器には、曲物などの容器や土木材･板などとともに、「天平」や「呉部足国」等が記された習書木簡１点を含む２点の木簡出土していることが注目される。また04C区では南岸部が不自然に北に屈曲する部分があり、古墳時代の川岸形であることは確認できるが、古代まで残存していたかは不明である。

南部には安城市教育委員会調査分の08A区でSD194とそれに直交するSD3があり、SD3はさらにSD44に続くと考えられる。SD44は遺存状況が悪く、不定形で深さが７cmほどしか残っていない。SD194は深さ22cm、SD03は幅479cm、深さ55cmを測る。SD03は中央部で２段になって落ち、下段の幅は140cmである。SD194を西側にさらに延長すると、愛知県埋蔵文化財センター調査分の04A区SD57と重なる。報告書ではSD57は直交するSD56と合わせて弥生時代中期の方形周溝墓として認識されているが（愛知県埋蔵文化財センター2009）、安城市教育委員会の報告書（安城市教育委員会2012）や早野浩二氏の論考（早野2017）で指摘されているように、方形周溝墓の周溝ではなく、古代の溝SD194に継続する溝としてみることが妥当と思われる。SD56は幅205cm、深さ68cm、SD57は幅157cm、深さ55cmを測る。さらにこのSD56は南下して市調査08B区SD27に続くと考えられる。SD27は幅550cm、深さ96cmで、不定形ではあるが、断面形は段状を呈する。またSD3—SD44と続いた東側の溝はさらに南の04E区NR02に延びると考えられる。NR02は幅約500cm、深さ約40cmを測り、溝内は部分的に深くなっており、報告書では自然の落ち込みまたは低地部分といった認識がなされている。NR02からは銅バリ・銅滴・銅滓・炉壁・鋳型など銅の鋳造関連資料2411点が出土しており注目される。

上記の溝群で区画された範囲は東西40m、南北62m以上となる。内部の大部分を占める市調査08A区は削平を受けているためか上面の遺構数は多くないが、SD57—SD194に沿うような柱穴列や同方向を向く柱穴列や建物跡の可能性があるものなど、区画に合わせた施設の存在が推定できる。また04C区のSD56・SD57の東側にある廃棄土坑と考えられるSX02からは上位のSX03を含め17点の墨書灰釉陶器が出土している。また旧河道の北側には、竪穴建物と掘立柱建物が展開すると考えられる（図５）。

区画溝が形成された後、古代の後半から末には溝は埋没していくようで、溝窪地を利用するようなかたちで04C区SK35などの土坑が掘削される。またSX02上にもさらに同様の廃棄土坑SX03が造られている。さらに中世に至っても、区画溝に規制されるようにSD290が設けられており、その時期までは区画の影響が残存していた可能性がある（図６）。

旧河道の北側では中世前半と考えられる水田が北東から南西に展開している。04A区で検出されているSB02やSB04については、水田と同じ方向を向いているため、水田の可能性もある。また水田に切られる形で04A区から08A区にかけて並行溝群が存在する。この溝群については、時期が特定できないが、西側の古代の竪穴建物に伴う耕作地・畑とも考えられる（図７）。

＊寄島遺跡11C区については、第１遺構面の図を使用した。

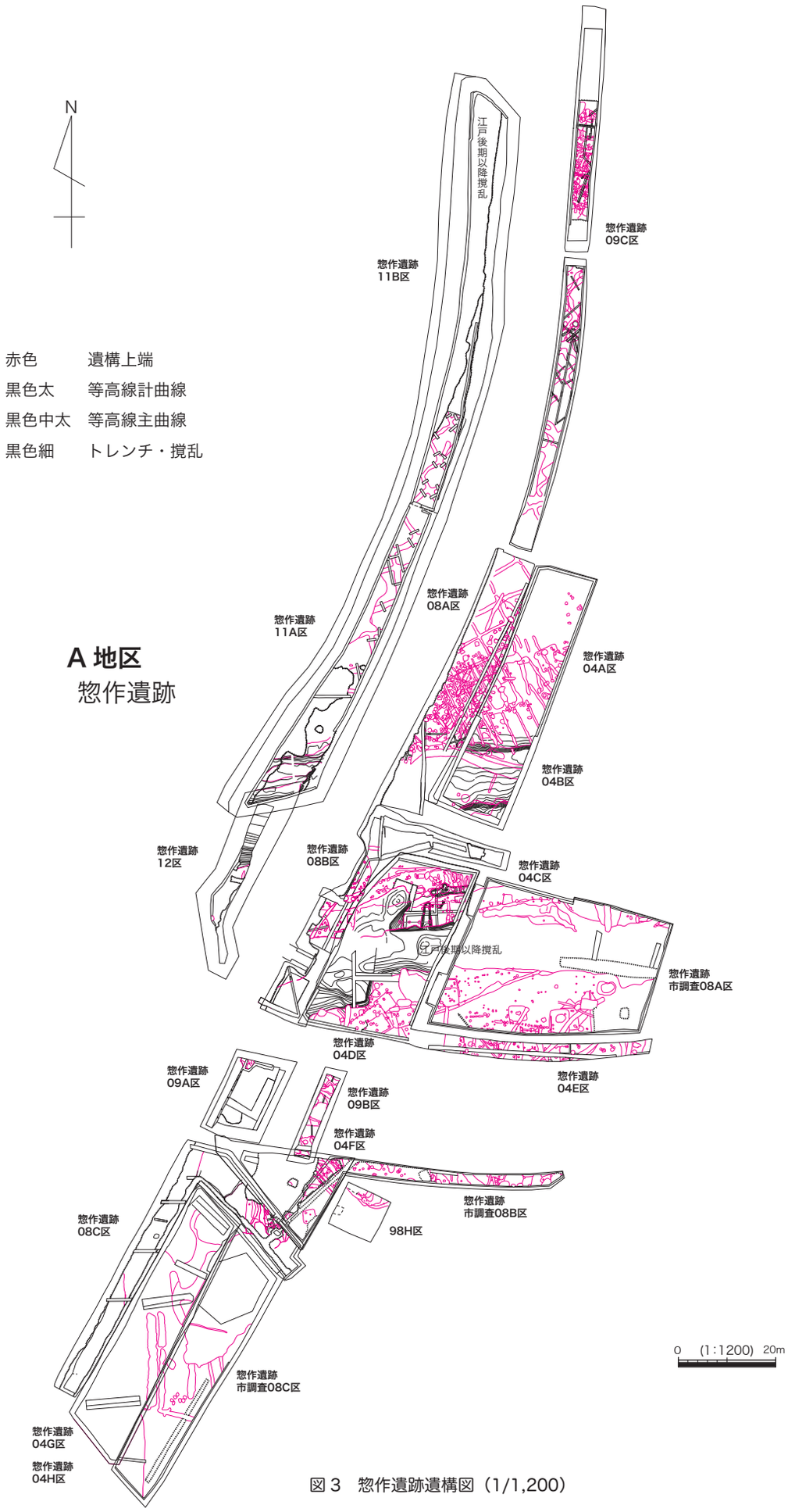


図３　惣作遺跡遺構図（1/1,200）

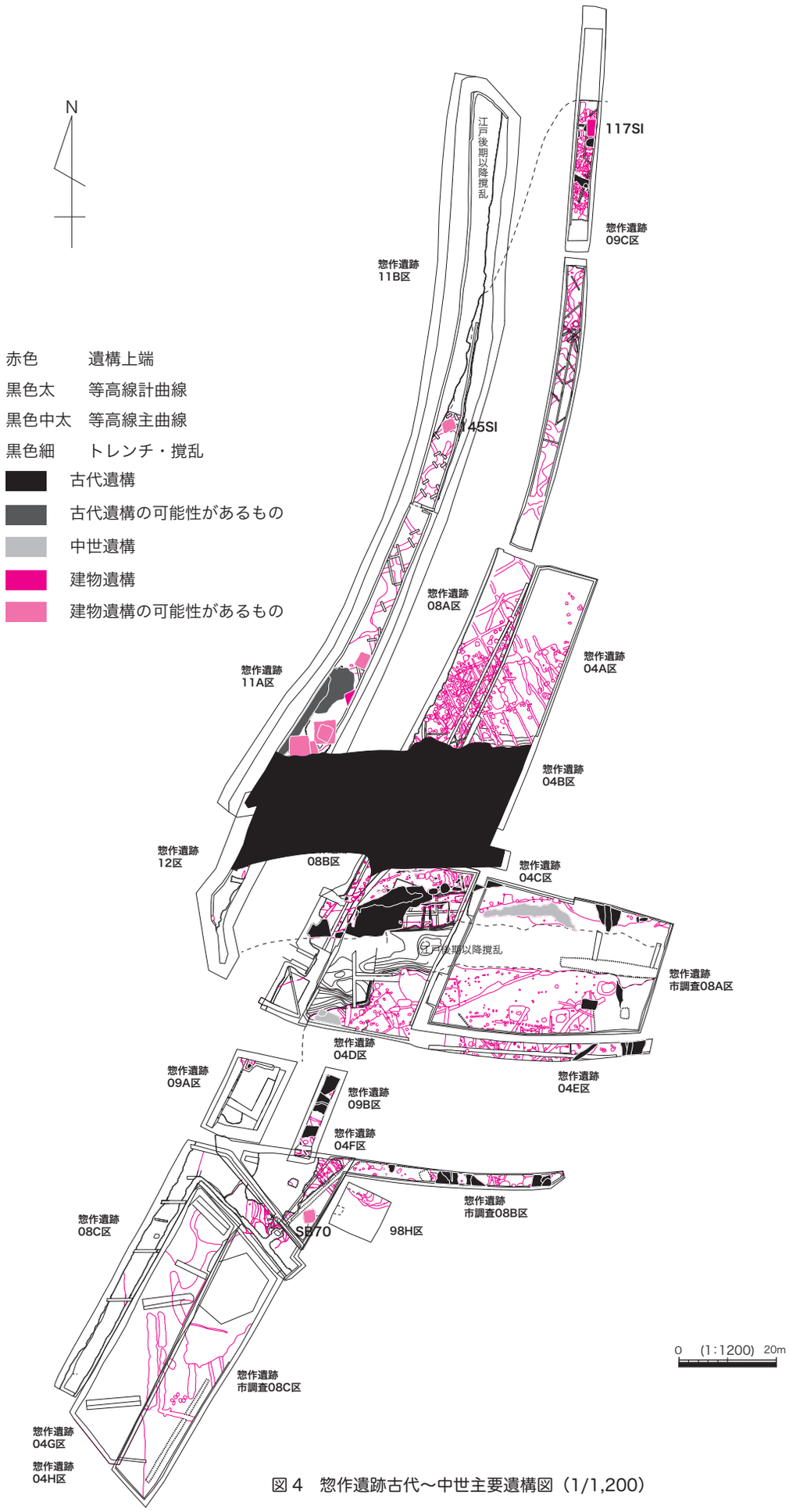


図４　惣作遺跡古代～中世主要遺構図（1/1,200）

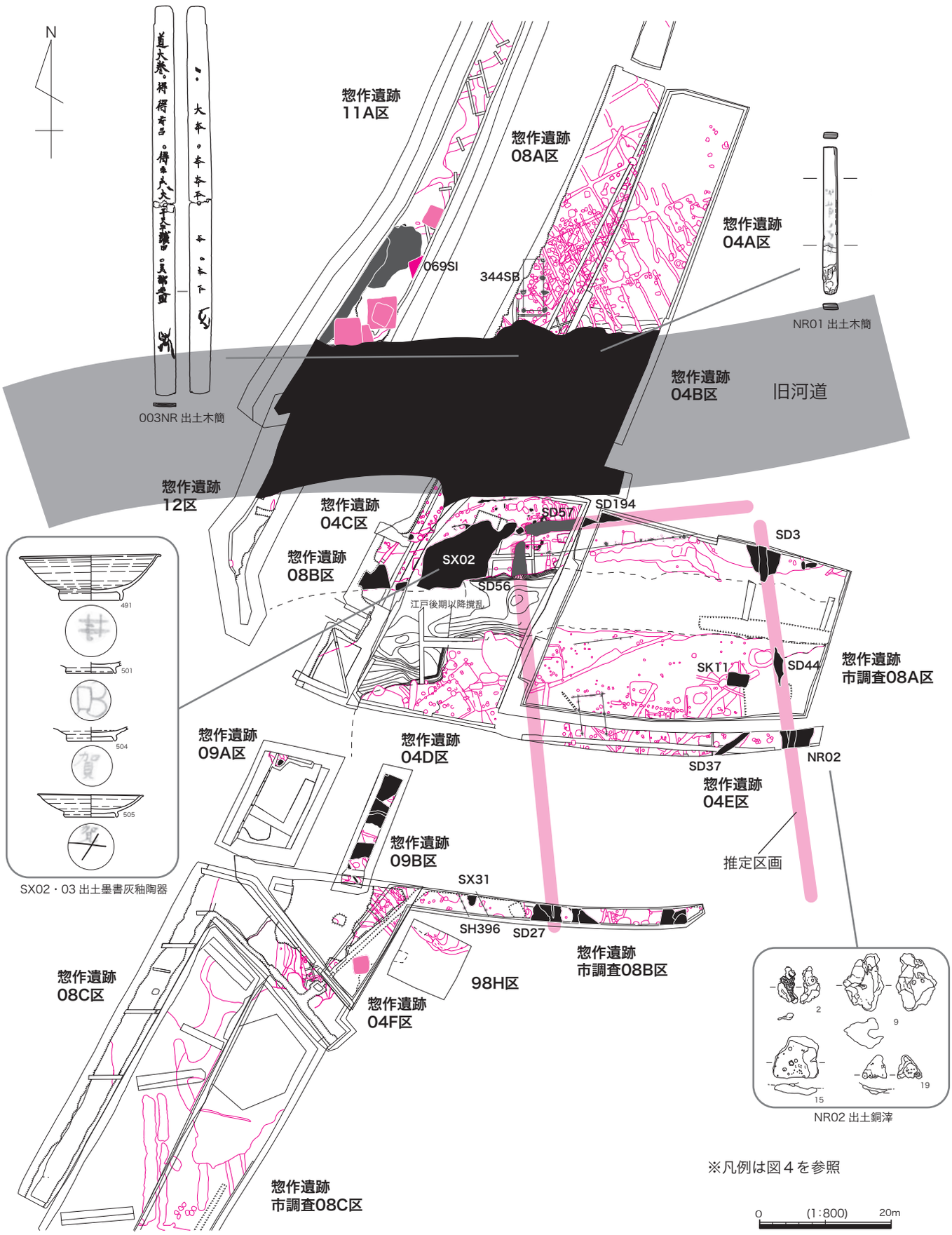


図５　惣作遺跡古代遺構配置図（1/800）

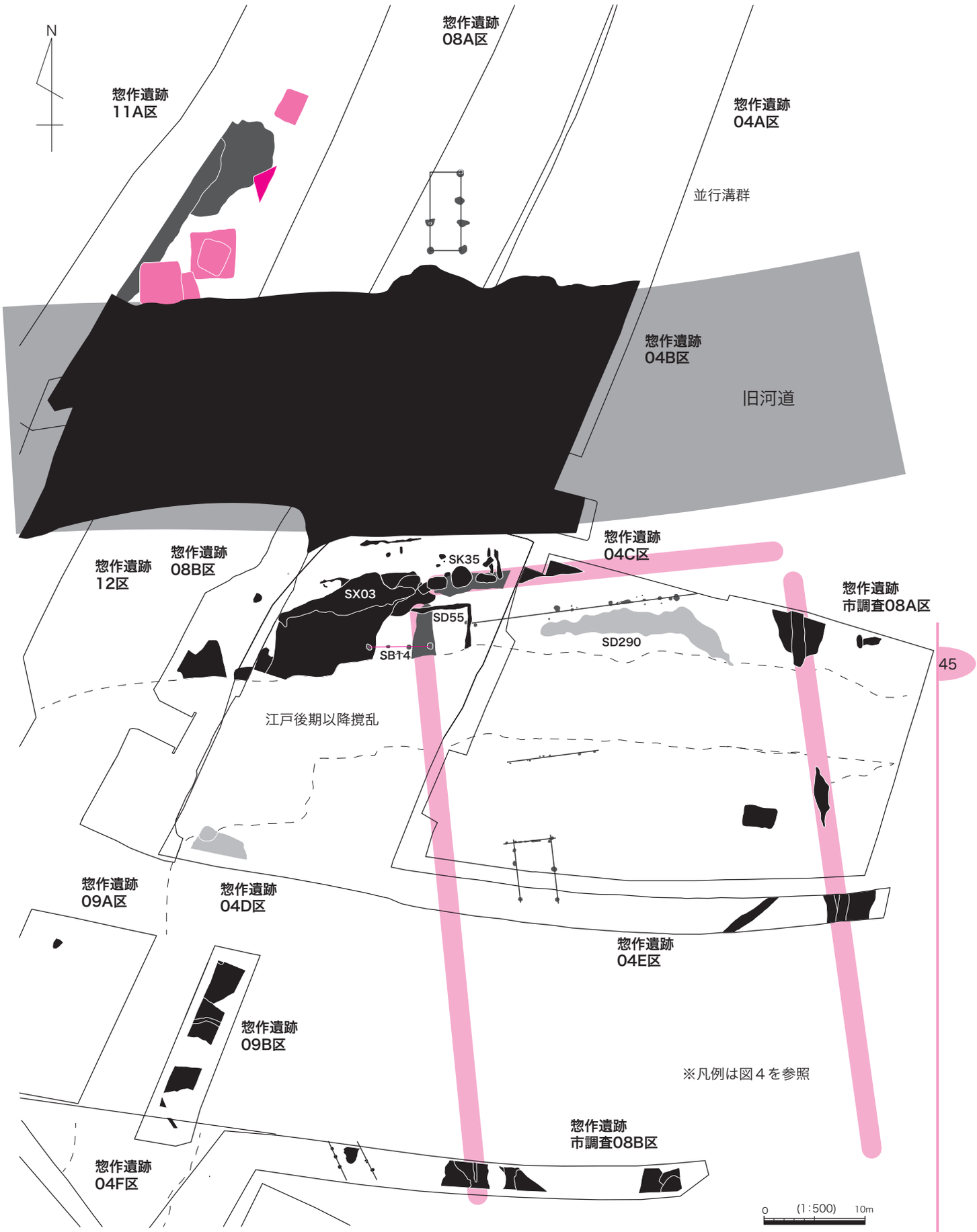


図６　惣作遺跡古代以降の遺構配置図（1）（1/500）

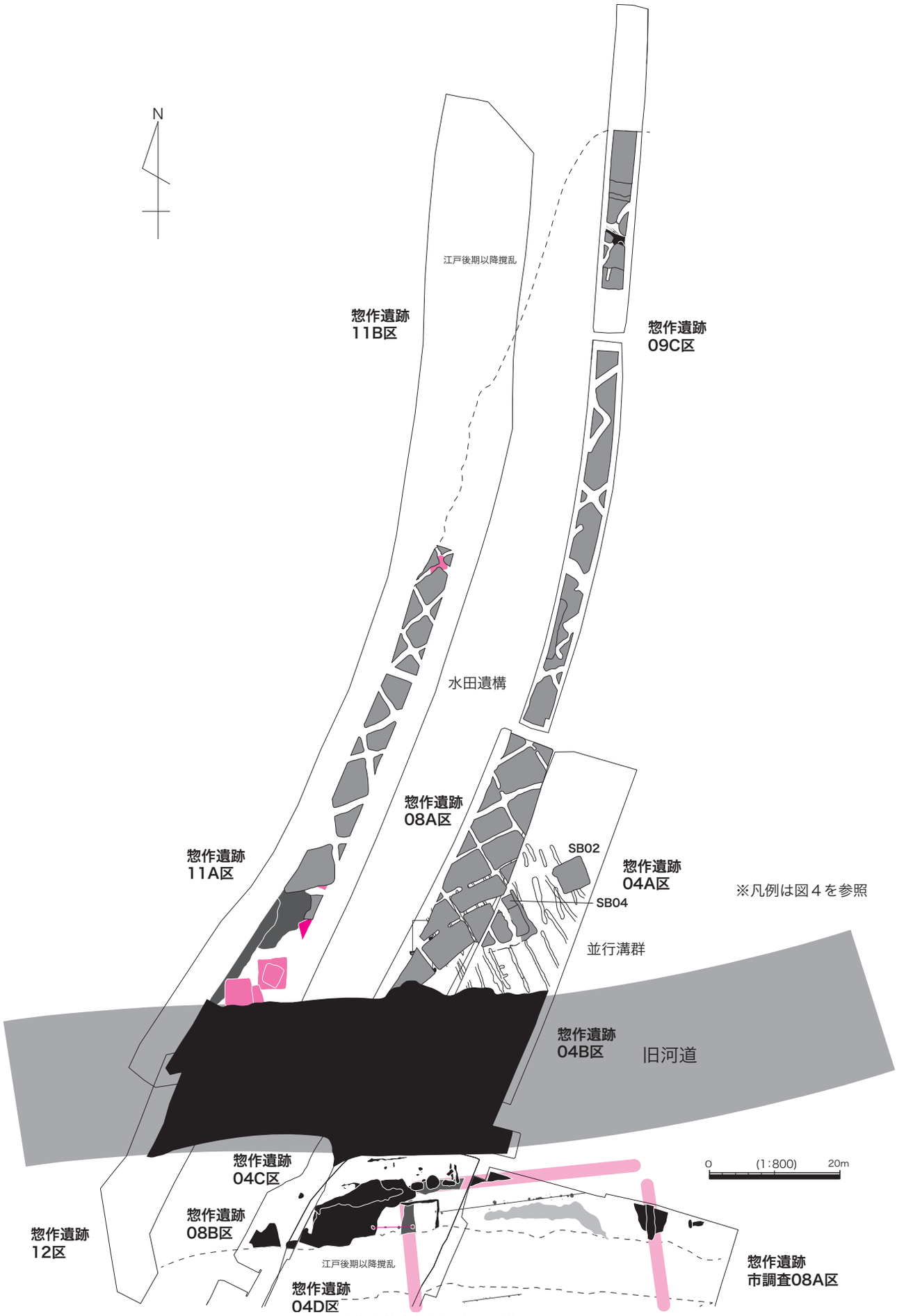


図７　惣作遺跡古代以降水田遺構（1/800）

B 地区（寄島遺跡*・下懸遺跡）

寄島遺跡 11A 区には、同方向を向き、且つ連続・重複する竪穴建物・竪穴状遺構・周溝状遺構・溝が集中する。これらの遺構は比較的低地に存在することと合わせ、耕作地・水田の可能性が考えられる。やや高くなる下懸遺跡 15 区や下懸遺跡 00E 区では土坑や溝が検出されており、ここを居住域と推定すると、居城域と耕作域とのセットとなる（図８右）。

C 地区（姫下遺跡）

姫下遺跡 06A 区･06B 区･05A 区･06C 区では、時期不明なものを含め、B 地区でみられたような連続・重複する遺構が低地部部分の 06A 区・06B 区・06C 区に展開しており、耕作地・水田と考えられた。また 05A 区では床下周溝をもつ竪穴建物や竪穴建物か竪穴状遺構（水田）と判別できない遺構が散在する。古代にまで床下周溝をもつ竪穴建物が残存するかという問題は残っているが、居住域と推定したい。さらに 05A 区南部から 05B 区にかけて、上記の竪穴建物や水田遺構が希薄の部分に並行溝群が存在する。溝群のうち 05A 区の SD64 からは 12 世紀の山茶碗が出土している。同時性を不問としてこれらの遺構をまとめると、居住域と耕作域･水田、耕作域・畑という区分があったと考えられる（図８左）。

3. まとめ

先述したように、鹿乗川流域遺跡群南群においては、下位の弥生～古墳時代遺構と重なることや遺物量が少ないなどのことから、本文では遺構の時期決定や時期区分を、かなり大きく捉えて検討することとなった。ただ A 地区でみられたように、古代から中世前半期にかけては、埋没したものがあったとしても、遺構や空間区分などは一程度継続していたと考えられる。

鹿乗川流域遺跡群南群では、溝で区画されるエリアと居住・耕作地エリアに分かれる。惣作遺跡の溝で区画される地区では木簡の使用や木器・銅器製作が行われた可能性があり、西側約 300m にある寺領廃寺との関連が想定される。さらに区画の北側には、居住域と耕作地（水田･畑）がセットとなる地区がいくつか散在していたと考えられる。

時間幅をさらに細かく検討し同時性の精度を上げた場合に上記の内容が的を射ているかは、はなはだ心もとないものがあるが、今後の課題としたい。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 2007『上橋下遺跡・鹿乗川流域遺跡群（高圧線鉄塔移設地点）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集

愛知県埋蔵文化財センター 2009『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 144 集

愛知県埋蔵文化財センター 2009『惣作遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 158 集

愛知県埋蔵文化財センター 2012『姫下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 168 集

愛知県埋蔵文化財センター 2012『惣作遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 172 集

愛知県埋蔵文化財センター 2015「寄島遺跡」『年報 平成 26 年度』愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター 2017『寄島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 204 集

愛知県埋蔵文化財センター 2017「下懸・寄島遺跡」『年報 平成 28 年度』愛知県埋蔵文化財センター

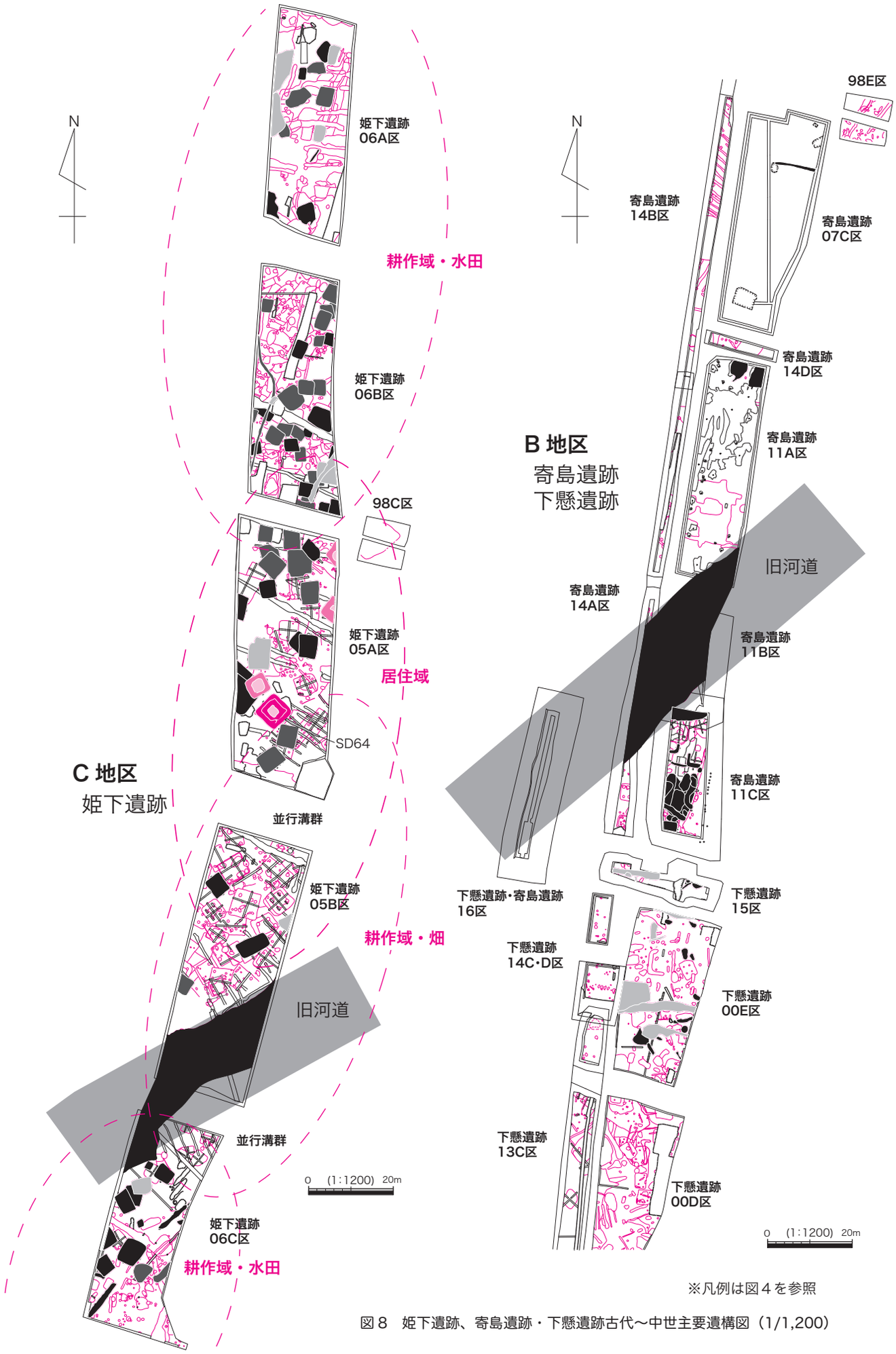
愛知県埋蔵文化財センター 2018『宮下遺跡・下懸遺跡 II・五反田遺跡・惣作遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 210 集

安城市教育委員会 2012『惣作遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 28 集

考古学フォーラム編集部 2013『変貌する弥生社会　安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム

永井邦仁 2017「安城市寄島遺跡における古墳時代前期の集落」『研究紀要 第 18 号』愛知県埋蔵文化財センター

早野浩二 2017「鹿乗川流域遺跡群における「方形周溝墓」の再検討」『研究紀要 第 18 号』愛知県埋蔵文化財センター



※凡例は図４を参照

図８　姫下遺跡、寄島遺跡・下懸遺跡古代～中世主要遺構図（1/1,200）